

◇十二月三十一日 曇

大晦日ナリ

午前一〇・〇〇ヨリ歩兵104聯隊ノ朱竜礮ヲ視察ニ出カケ

在滁阜第II大隊副官ノ心遣ヒニテ、二里先キ迄五〇米置キニ步哨ヲ立テ警戒シ呉レル、朱竜礮ニ至ル沿道、全然地形風色満洲ナリ、今後前進ノ困難思ヒヤラル

朱竜礮ハ寒村ナガラ善ク清潔ニ宿営シアリ、聯隊長以下討伐ニ出カケ留守ナリキ、昼食ノ馳走ニナリ氣ノ毒セリ

夜、野戦建築班ノ作り呉レタル風呂、木ノ角風呂ニ入ル、上海以來初メテ、否内地以來ノコトナリ、又日用品ヤ御菓子ノ加給品渡ル、年越シナレバコソナリ

夕食、本部下士以上ヲ会シ年越シヲナス

田代部隊、施家集ニテ合計一〇〇〇ノ第101、102、48師ノ敗殘兵ト交戦、一五〇ヲ斃シ潰走セシム（一月一日報告）

両角業作 手記

歩兵第六十五聯隊長・歩兵大佐 22期

南京大虐殺事件

幕府山東側地区、及び幕府山付近に於いて得た捕虜の数は莫大なものであった。新聞は二万とか書いたが、実際は一万五千三百余であった。しかし、この中には婦女子あり、老人あり、全くの非戦闘員（南京より落ちのびたる市民多数）がいたので、これをより分けで解放した。残りは八千人程度であった。これを運よく幕府山南側にあつた厩舎か鶏舎か、細長い野営場のバラック（思うに幕府山要塞の使用建物で、十数棟併列し、周囲に不完全ながら鉄線が二、三本張りめぐらされている）——とりあえず、この建物に収容し、食糧は要岩地下倉庫に格納してあつたものを運び、彼ら自身の手で給養するよう指導した。

当時、我が聯隊將兵は進撃に次ぐ進撃で消耗も甚だしく、恐らく千数十人であつたと思う。この兵力で、この多数の捕虜の処置をするのだから、とても行き届いた取扱ひなどできたものではない。四周の隅に警戒として五、六人の兵を配置し、彼らを監視させた。

炊事が始まつた。某棟が火事になつた。火はそれからそれへと延焼し、その混雑はひとかたならず、聯隊からも直ちに一中隊を派遣して沈静にあたらせたが、もとよりこの出火は彼らの計画的なもの

で、この混乱を利用してほとんど半数が逃亡した。我が方も射撃して極力逃亡を防いだが、暗に鉄砲、ちよつと火事場から離れると、もう見えぬので、少なくとも四千人ぐらゐは逃げ去つたと思われる。私は部隊の責任にもなるし、今後の給養その他を考えると、少なかつたことを却って幸いぐらゐに思つて上司に報告せず、なんでもなかつたような顔をしていた。

十二月十七日は松井大将、鳩彦王各將軍の南京入城式である。万一の失態があつてはいけないというわけで、軍からは「俘虜のものどもを『処置』するよう」——山田少將に頻繁に督促がくる。山田少將は頑としてハネつけ、軍に収容するよう逆襲していた。私もまた、丸腰のものを何もそれほどまでにしなくともよいと、大いに山田少將を力づける。処置などまっぴらご免である。

しかし、軍は強引にも命令をもって、その実施をせまつたのである。ここに於いて山田少將、涙を飲んで私の隊に因果を含めたのである。

しかし私にはどうしてもできない。

いろいろ考えたあげく「こんなことは実行部隊のやり方ひとつでいかようにもなることだ、ひとつに私の胸三寸で決まることだ。よしと期して」——山田大隊長を招き、ひそかに次の指示を与えた。

「十七日に逃げ残りの捕虜全員を幕府山北側の揚子江南岸に集合せしめ、夜陰に乗じて舟にて北岸に送り、解放せよ。これがため付近の村落にて舟を集め、また支那人の漕ぎ手を準備せよ」
もし、発砲事件の起こった際を考え、二個大隊分の機関銃を配属する。

十二月十七日、私は山田少将と共に軍旗を奉じ、南京の入城式に参加した。馬上ゆたかに松井司令官が見え、次を宮様、柳川司令官がこれに続いた。信長、秀吉の入城もかくやありなんと往昔を追憶し、この晴れの入城式に参加し得た幸運を胸にかみしめた。新たに設けられた式場に松井司令官を始め諸将が立ち並びて聖寿の万歳を唱し、次いで戦勝を祝する乾杯があった。この機会に南京城内の紫金山等を見学、夕刻、幕府山の露营地にもどった。

もどいたら、田山大隊長より「何らの混乱もなく予定の如く俘虜の集結を終わった」の報告を受けた。火事で半数以上が減っていたので大助かり。

日は沈んで暗くなった。俘虜は今ごろ長江の北岸に送られ、解放の喜びにひたり得ているだろう、と宿舎の机に向かって考えておった。

ところが、十二時ごろになって、にわかに向方面に銃声が起こった。さては…と思った。銃声はなかなか鳴りやまない。そのいきさつは次の通りである。

輕舟艇に二、三百人の俘虜を乗せて、長江の中流まで行ったところ、前岸に警備しておいた支那兵が、日本軍の渡河攻撃とばかりに発砲したので、舟の舵を預かる支那の土民、キモをつぶして江上を右往左往、次第に押し流されるという状況。ところが、北岸に集結

していた俘虜は、この銃声を、日本軍が自分たちを江上に引き出して銃殺する銃声であると即断し、静寂は破れて、たちまち混乱の巷となったのだ。二千人ほどのものが一時に猛り立ち、死にもの狂いで逃げまどうので如何ともしがたく、我が軍もやむなく銃火をもってこれが制止につとめても暗夜のことで、大部分は陸地方面に逃亡、一部は揚子江に飛び込み、我が銃火により倒れたる者は、翌朝私も見たのだが、僅少の数に止まっていた。すべて、これで終わりである。あつけないといえばあつけないが、これが真実である。表面に出たことは宣伝、誇張が多過ぎる。処置後、ありのままを山田少将に報告をしたところ、少将もようやく安堵の胸をなでおろされ、さも「我が意を得たり」の顔をしていた。

解放した兵は再び銃をとるかもしれない。しかし、昔の勇者には立ちかえることはできないであろう。
自分の本心は、如何ようであったにせよ、俘虜としてその人の自由を奪い、少数といえども射殺したことはへ逃亡する者は射殺していいとは国際法で認めてあるが…；なんと…；なんとも後味の悪いことで、南京虐殺事件と聞くだけで身の毛もよだつ気がする。

当時、亡くなった俘虜諸士の冥福を祈る。

日記

昭和十二年十二月
十二日 午後五時半、蚕糸学校出發。午後九時、倉頭鎮着、同地宿宮。
十三日(晴) 午前八時半出發。午後六時、午村到着、同地宿。敗残兵多シ。

(以下原文は横書き)
十五日 俘虜整理及附近掃蕩。
十六日 同上。南京入城準備。
十七日 南京入城参加。Iハ俘虜ノ開放準備、同夜開放。
十八日 俘虜脱逸ノ現場視察、竝ニ遺体埋葬。
十九日 次期宿营地ヘノ出發準備。
二十日 晴 九時半出發下関ヲ經テ浦口ニ渡河。
二十一日 晴 西葛鎮ニ宿宮。
二十二日 晴 全椒ニ向ヒ入城。同地警備。(途中山田少将ハ滁県ニ)
二十三日 警備方針決定。中隊長以上ニ必要ノ指示ヲ与フ。
二十四日 附近視察。
二十五日 慰靈祭ノ為滁県ニ出發(軍旗ヲ奉ジ)、同夜同地着。
二十六日 師団慰靈祭。(老陸毛ノ要図ガ天覽ニ供セラレ、且ツ朝香宮軍司令官ノ室ヲ飾ルモノハ此要図一枚アルノミニテ他何物ナシ)
二十七日 全椒ニ帰還。
二十八日 慰靈祭場及陣地偵察。

二十九日 慰靈祭。(山田少将及師団代表トシテ吉原作戰主任參謀來着)
三十日 師団會議事項下達。
三十一日 陣地視察。此夜杉山陸相、樺村中隊長ノ未亡人ノ手紙ヲ受ケル。

[注] この記録は、第十三師団歩兵第六十五聯隊長両角業作大佐が、終戦後しばらくしてまとめたものである。昭和三十七年一月中旬、求めに応じ阿部輝郎に貸し与えられたものを筆写し、保存しておいた。原文はノートに書かれ、当時の日記をもとに書いたといふ。

